

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2023. 8



創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまなじ氣持である。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

一〇二三年 八月号 (通巻七八三号)

◇今月の二十首詠……房州ひじき

小野雅子 2

■作品[A]

A C B A

田土成彦・田土才恵他 4
辰巳洋子他 20

田端典子他 48

高澤匡子他 58

石澤利夫他 72

木村恵子・許田邦子他 36

木村恵子・許田邦子他 72

藤井裕子・田中昌子 16

藤井裕子・田中昌子 16

◇今月の二人

私と短歌との出会い (25)

吉池ケサヨ 19

今月の二人・作品評

久我田鶴子 18

■〈第一歌集を読む〉 5

市野千鶴子歌集『あわき茜』

藤田しん子

最近の歌誌より

〔編集部〕 85

創刊70周年記念地中海全国大会 (浜松大会) ご案内

86

— 風の音さえ包む —

◇シルクロード・カフェ

【責任編集】 木村文子

46

クリップ…… 84
神田通信…… 表3

遊覧寄港 〈旅にでよう〉

藤岡みゆき 42

■歌壇月旦
穂村弘『短歌のガチャボン』

西堤啓子 43

送風塔

藤森巳行・土井谷恭子 44

■六月号作品批評

A……奥田陽子・小原香里 64

B……箕浦 勤・潮田千代
C……辻田聰美

オリーブ集……坂上直美

房州ひじき

小野 雅子

一九三六年生まれ。
一九七一年入会。羊グループ所属。
歌集に「花籠」「白梅」他、
エッセイ集に「小野茂樹片片」がある。

手で折りて短くしてから人參と油揚げと煮る房州ひじき

海で採り浜で乾し上げ売られるる美味なるひじき折折に煮る

折るときに彈けしものか翌日の床に見つかる短きひじき

水に浸し驚くほどの嵩になる乾燥ひじきいつも戸棚に

ひじき
鹿尾菜干す岬の人の短歌載る春たけなはの「朝日歌壇」に

『手しおにかけた私の料理』六十年前の本なりときどき開く

たけのこは赤唐辛子と糠を入れ五十分茹でひと晩冷ます

今と違ふことのひとつは砂糖の量、半分にして口に合ひたり

「味の素」当然のことと書かれるる添加物とて今は使はぬ
ゆるやかな時間の人も世の中も普通のことと生きるし昭和
記憶の欠けを埋めてくれる人は亡く海の思ひ出とぎれたるまま
サーフィンの会場となることなどは思ひもせずに砂に座したり
冬の海に被りし白きストールはうすく黄ばみて藏はれてゐる
昼餉にとひじき煮てゐるそのときに関東大震災おそひしと姑はは
姑逝きし平成十年十二月弔ひの夜の寒さ忘れず
時短料理ばかりの並ぶレシピ本 白割烹着のむかしなつかし
五十秒、三分半と示されて電子レンジの調理で暮らす
好き嫌ひ多い子の好きな総菜のひとつがひじき ほつとするなり
豪華なる旅の案内 和朝食にひじきの煮物は出るのだらうか
おいしくてほかのは買へぬ正月に玉井静子さんに頂くひじき

作品 A

田 土 成 彦

日 曜

・ 宙

一ミリほどのカタツムリが蜗牛の格好して糞裏に潜む生きてゐるよと
さう言へば今日は祝日小園の子供の声の朝から高く
珈琲はドリップがいいゴミ出しのない日曜の朝のゆとりに
木は千年石は万年遺伝子は一億年の記憶を保つ
この一年キンドルの無料図書ばかり選び読み継ぐ百冊ばかり
一生の大事ならねど理髪屋に髪剃られ居るカミソリ光る
充電を忘れたスマホの無反応むしろ安らぐ思ひに眺む

田 土 才 惠

雨 雲

・ 宙

雨雲の上ゆく飛行機物語めく音残し朝は始まる
こもこもに三人のあした始まれる通学まえの足音高し
娶る日の孫のことなど夢のなか濯き物干してと言い残し行く
馬鹿らしいほど似る孫といふ朝の隔世遺伝に振り回されて
通学の電車に残す雨傘の行方さびしい回送電車
いつの間にこんな気温になつたのか孫との暮らしに夏風の吹く
日帰りのささやかな旅わがひと日繕い戻るマイキッチンへ

玉 井 純 子

コロナ明け

・ 羊

コロナ禍の去りし黄金週間に五十回超えし羊雲忌過ぐ
ゴールデンウイーク直後の羊雲忌想いはコロナに制限されぬ
三年間の日課でありし偽りの検温表を重ねて捨てる
コロナ禍に使い古して買い替えるソファーから体温計が出てくる
朝食のビュッフェを待て一時間コロナ制限解かれし初夏に
コロナ明け那覇に月桃にひとの目をばかりながらマスクを外す
コロナ禍を理由に行かず済ましおり明けて打ち消す本当の気持ち

高 尾 恭 子

マスク

・ 大

さみどりの風に吹かれて通院の帰路に立ち読む「80歳の壁」
特集の「老後・終活」マニュアルを拒みて小さき飛行機とばす
思い出を語りつくせば近況は以下同文の同期の集い
花マルはつけてもらえぬ近況をぼそりぼつりと二次会の席
三年ぶりにマスクをはずす少年の赤いほっぺが骨張っている
口元をゆがめ物言ふ政治家の主張かわらずマスクをはずす
陽だまりのホテルブッフェにブラウスをゆらす女の声はねかかる

高津砂千子 水玉もよう

・風

中島央子 阜月

・森

純白の花のまぶしき夾竹桃まだ五月なる空ひろびろと

「骨折して一年経つね」友言えりすっかり忘れていたるわがこと
ゆつくりと転ばぬように心せし試歩の道いまヒメジヨオン咲く
ヒメジヨオン咲くへくなりて梅雨近し美しきもの探すたのしみ
むらさきに染まる指先なんのその桑の実を摘む洗濯終えて
つやのある柿の若葉のひと枝を添えて友への手みやげとせん
美術館帰りに選ぶマグカップ水玉もようによこころが動く

滝田靖子 約束

・新

約束の日時変へたいとメール来て何だらう少しもやもやとする
約束は天気に左右されるらしい雨の日は出かけたくないと言ふ
助手席にアイスクリームを食べてゐる愚痴も泣き言も許さぬ友は
コンビニにそれぞれの昼飯買つてゐる湖畔のカフェに寄りもしないで
評判の蕎麦屋もカフェも素通りのドライヴこんなはずやなかつた
快楽のスイーツ千円生命を養ふコロッケ八十四円
宇宙への旅に支払ふ百億円のその百億円を欲る飢餓のあり

竹下妙子

春たけなは

・霧

通り過ぎまた戻りきてわが仰ぎ見る今ひらきたる梅の一輪
空を指す秀の枝するどきひとところ淨らに梅のくれなる点る
雨あがり朝を銀色にひからせて蜘蛛が張りたる網高きかな
幾年を鳴き繼ぐ定めか野の鳥は春には透る声にて鳴けり
夕ぐれの童話のごとき明るさにわれにかへりてくるもののあれ
夕光りうつくしければ硝子を這ふ青虫に青き酸ありと思ふ
いらちゐる吾の心に点ることシグナルの青うるみてつきぬ

若葉もゆる八十八夜の朝の卓娘より届きし新茶が香る
いつせいに天を見上げて咲くサツキ坂道つづく傾りを埋め

藍ふかき江戸切子の白菖蒲ひらかむとする曾孫の初節句
春ま屋五月野つらぬく常磐道大型トラック追ひ抜いてゆく
サングラスに庇ふ眼に遠見ゆる筑波の嶺の霞立ちたる
今は亡き師と登りたる筑波山車窓はるかに過ぎてゆくなり
今日の日も忘れゆくならむ大連れて山桜の山をもとほる

永田進一

佐保路吟行

・山

秋篠寺秘仏に憧れ参詣の女人多かり秘めたる心

秋篠寺玉砂利踏みて苔の庭伎芸天静もる本堂の凹凸

大極殿たかみくら拝礼のカップルは大きな鞆持ち群馬からとう
不退寺の池の菖蒲の傍らの石碑に記さる業平の歌
かの名歌も「からくれない」の落語となり親しまれたり今の世にも
不退寺の説明人より教える「柿」に非ざる「柿」という文字
西大寺バス停に立つ僧一人静かに捧ぐ鎮魂の祈り

永塚節子

雨

・銀

植え込みに入りては戻るを繰り返すせきれいの子としばし遊べり
点ほどの小さき眼に語りくるも鳥語分からず 春の雨降る
雨には雨の楽しみありて廻り道ブロック塀にかたつむり探す
話したき人はおらず夕方定家葛の香にたたずめり
ゆつたりと飛びつとも燕の羽の先はきりりと銳さに充つ
高く低く小魚探し高三羽生きなんとする飛翔たくまし
遠くには大型ヨット近くには波待つサーファー湘南の海

仲 西 正 子 空

・沖

細き枝にぶらさがりいて羽化せむとオオゴマダラのひたむきを見る
たたまれてちぢれし翅を展げゆくオオゴマダラの見よ晴れ姿
ハウスにて撫育してきしオオゴマダラ放てばすぐに視界より消ゆ
戻りきてここにて産めよと蝶放つ蓬萊鏡の花の生け垣
命ひとつオオゴマダラよ悠然と飛べよ気高く沖縄の空
市庁舎に掲げられたる鯉のぼり写生の児らの眼も清し
鯉のぼり市庁舎にこそ舞いてあれ甘世のしるし伝えよ児らに

中 村 博 子 ボタニカル・アート ・ 漣

科学性芸術性を合わせ持つボタニカル・アート初めて目に見る
夫の知人田辯範男のボタニカル・アートの映ゆる「堀川ゴボウ」
朝ドラの「らんまん」脳裏に過りゆくボタニカル・アート展巡りゆきつ
桟敷席の下にゆらゆら赤提灯点れる南座のS席に座す
南座の今日もS席へ夫と座しゆうり「若き日の親鸞」を観る
小鳥一羽きらきら描るるカードには八十三歳祝う女孫よ
男孫くれし誕生祝のあわき小花咲くスリッパをインテリアとなす

西 堤 啓 子 つばめ

・ 天

重すぎる話は水に浮かべよう沈むともよし藻屑となれば
滝に立ち身うちの涙を流し去り爪先でも緑に染まる
落ちて落ちてなお落ち続け滝の水 枯れないのちの旅を始める
さらついた心に朝の光さし弾みもどり来 つばめ戻り来
がさりと蛇の逃げゆき森にさす光の粒の白き立夏へ
上書きの記憶に住まうわたなしの「私」でないふるまいを聞く
傷つけば保たれるなく変幻の記憶が住まう脳をかなしむ

萩 葉 子 うの花

・銀

バス停に急ぐ線道タンボボに短くあいさつ今日は大安
タンボボが咲く線道の休日はザリガニとりの父子二組
「近かったらどんなに楽しかったことか」同級生の電話にうなづく
うの花がやっとふたつ咲きましたのあたりだろう街道書めくる
言葉が消えた私に娘のプレゼント「短歌用語辞典」
カーネーションの水かかる息子と女孫とのいとき思い
泣きながらひとりで歩く男の子 ウクライナの空 灰色の空

白 子 れ い 春の旅

・ 洛

コロナ禍に温泉めぐり諦めて地元の風呂場で温泉気分
広き風呂ゆったりお湯につかりいて温泉気分充分味わう
コロナ禍のなければ今ごろ春の旅ゆったりお湯につかりていいに
あさ朝の吾を待ちくわし驚いすこ今年に入りて姿のあらず
ホーケキヨと朝の驚われの歩み励ましくるふた声三声
ふたたびはきたらぬ「とき」を過こしおり心豊かに踏みしめ歩まん
ひと住まぬふる里の家夢にみる無花果・みかんの生りいる庭も

西 堤 啓 子 ぱぱり ょうこ

・ 鹿

私の趣味のひとつは辞書のなか散歩すること往きつ戻りつ
訪ねゆく當て所なければゆきゆきて思いもかけぬ邂逅のあり
ページ繰るやさしき音のぬくとさを耳に集めてしましたゆどう
言の葉をかき分けゆけり書きひびき悪しきひびきをも咀嚼しながら
散歩路に倦みたる頃あいタンボボのわた毛のまろみ放たれんとせり
深読みもオツなる事とし言の葉と対峙したりぬ缶コーヒーを手に
病む我の身の丈の趣味としこの散歩たのしからずやと北東笑みいる

浜谷久子 離

・地

藤田美智子 野良猫

・新

難しい顔して眠る君の夜心掛かりのいつの歳にも
胃の痛み奥歯の痛みを噛みしめて眠る眼ろう春の夜長を

知らず知らずわが処方薬の増えていて夫の薬の袋を確かむ
いつしらで言葉少なくなる二人嘆も会話の要の一つに

児ら帰り静かなこの家連休の終わりはあれよと皆を連れ去る
誕生日祝いの一聲スマホ便りビデオ通話の受信に手間取る
婿、嫁に呼ばれて馴染む「お母さん」響きはいつも新感覚の

檜垣美保子

男の子

・昂

藤森巳行

・銀

二杯目のつづきに孫の所望する塩味の濃き三角むすび
雲だっけ群衆だっけ人の名だ クラウドの意味を囲む三世代
鍵をかけ風呂場に入る兄がいて裸に出でくる弟のいて 夏
昨日の残りのビーフストロガノフ十歳の男の子の三時のおやつ
男の孫にスプーンのマイク向けられてラップの早口言葉迫らる
旅立ちの朝の場面と少年は庭の信楽たぬきに祈る
雨がふり一日晴れてまた雨の庭のみどりにあまがえる眺ぶ

福田庸子

泣きべそ

・今

船田清子

思ひ出を行く

・天

中の一孫がテニスを始めたりミックスダブルス組めたらいいな
傘寿でもテニスは出来るもう一度ラケット握りコートに立たう
グリーンで死ぬかコートで倒れるかゴルフかテニスか最後の選択
自家製のあんこを包みしよもき餅ふる里の野の香りを思ふ
性格は大陸的で大らかと中国北京で生まれし妻言ふ
洗濯と掃除は少し手を抜くが女房殿の料理は美味し
金持ちも貧乏もあり我が人生愉快だったと義父最後の言葉

野辺の花春日に輝れるつかのまま古道にそへり
川筋をたどる修驗の道跡を進むはたてに黒髪山立つ
杉山のなだりの中に萌えそむる雑木の彩に生くる主張あり
山村の味を伝へる菜あまた嫁して五十年の友のもなし
一年生吹雪の朝を泣きへその友の手を取り行きし学校
満月の昇りゆく空仰ぎつつ遅れてをりし煙の草取る
四輪が三輪に特急も消ゆコロナ・少子化過疎の街まち

薄雲をすかす陽光に勢ひ立つ若葉に爛られ今日も励まむ
明くる空雀のにきはひビチユクチユと我的眠りの行きどころなく
いづくへも出かけて行けぬ老いの身はかつてたどりし思ひ出を行く
正倉院五弦の琵琶は世に一つかの玄宗も愛でにしならむ
亀茲國に五弦の琵琶のありしこと壁画が明かすキジル八窟
二十年前はブドウの一房も「お国のもの」と売らず ウイグル
イスラムを信ずる故か中国は彼らを虐待・処刑すと聞く

野良猫をかはるがはるに抱く児らの一人が「どうする」と耳を撫でをり
はつかにも電線の震へるさまを水張られたる田の面は映す
灰色の雲もつと低く垂れ込みよ泣くまいと心に決めし日暮れを
夕べには閉ぢても朝にまた開く蒲公英のやうにかなこころは
壱岐の島の酒〈横山〉を酌みながらとほく潮騒を聞くとくゐる
どのやうな姿にわれは映るのか在り処を知らぬ監視カメラに
高田松原の復興までの五十年に廃炉作業は終はりてゐるや

本元由美子

ぐらつく

・岡

松瀬トヨ子

ひよどり

・沖

わが庭にあまたの花の盛りたり吾が良心のぐらつくときも
さ緑のひかり清かな厨辺に家族の夕餉と今日も立ちをる
若き日に吾子に笑顔を見せざりき想へば妣もまたかくありき
きらきらと若葉耀く皐月にも紛争止まぬ人の歴史あり
この星の紛争止まず難民は幼き子まで兵士になると

この度の夫に付き添ふ上京は皇居の空も寿ぎくれたり
四年ぶり到着ロビーに待つ孫は広げし腕に直に飛びこむ

牧 雄彦 春の林

・大

うつうつと過ごす日なればモチツヅ島熊山に咲くを見飽きず
ひつそりとモチツヅ咲く山道を辿りて春を胸につぱいに吸ふ
時ならぬ寒き風吹くゆふべなれ川辺の草はみな春のいろ
まなしたの大坂の街タづきて黄砂にかすみ人ははたらくな
にゆゑにかくも迷ふや夕暮れの空に茜の雲うすれゆく
ほあほあと間抜けな声を響かせてカラスは春の林を飛び交ふ
こでまりの咲く道とほく人のかけ入り日に浮きて汝かとおもふ

松浦禎子

津軽

・羊

青白きひかりを曳きて夜のじしまモノレール走る最終のバス
鉢巻をして万歳の男の声選挙事務所とう洞窟の前
一枚ずつ引き出せば桃太郎の勇み肌園児がよろこぶ空の綿雲
どんぶらこ大きな桃を持ち上げる妹の声に園児の真顔
常夏のひかりを浴びて車輪梅の白き香りは紅型のかおり
椎若葉もえたつ森にひよどりのひよひよと辺りに散らす
夕方の影うすき土に人々と揺れゆれている夕顔の花

松永智子

朝

・昂

ものの音人の声なきビルの昼ひとり物読みもの書くひとかけ
あかときのビルにいまだ音のなく雨のふる音けふは休日
ペンを持つ右手のふるへ脈搏の音高くしてされど文字書く
あかときの間に目ざめ書かむとしされど右手のふるへの止まぬ
ひとの声稀なるビルの一隅にもえつ沈む落日をみる
夜半目ざめきくとなくきく闇の音十階ビルの六階の音
人を呼ぶ声とほざかりそののちにものの音なく朝あけてくる

松本多摩子

さくら

・桜

車窓より南部の山を眺めつつ津軽に入りぬはじめての土地
わが里の羽後も津軽も雪のくに因習ふかき地にあり経たる
車窓よりかたちを変えて現るる南部富士とう山容などか
ぶつきらぼう東北人の遺伝子も未だ消えざり旅のはじめに
高級魚の切目の厚き寿司八かんその美味われの胃はもてあます
弘前の桜満開に合わせたる今年の旅は花散り果てて
夜桜の幻影は胸に納めおきライトに映ゆる城門を出す

孫の名はとらさん好きの父さんがさくらに決めた二十年前
母の日に「元気でいてくれありがとう」泣かせるセリフ娘よりのライン
亡夫知らぬ孫に弔辞を見せる夕上司の語る教師人生
頼りなきまでに細くてわが髪の抜け毛に混じる孫の退しさ
老いたれば近くの他人が頼りなり老人会にも人の輪つなぐ
草取りを仕事となして今日の得初めて聞きしうぐいの声
コロナにも罹らず耐えて四年間ワクチン六回熱なく終わる

三 浦 好 博 健三郎忌

・銚

桃の節句又明年ゆこの日をば健三郎忌と呼びて忘れじ

流れやや「心無罣礙」に乱るも立て直し唱ふる般若心經

犬の糞ふくろに拾ひやさしき声かけつつ行くよ真愛大家

通学路を小学生が続々行くカーキ色に染むる世を如何にせむ

老朽化せし飛行機は墜落ぞそれよりもつと酷いぜ原發

急ピッチの西南諸島の軍基地化またも戦場と悲痛な声は

誰も死なず誰も殺さぬを誇るべし自衛隊なぜ変へねばならぬ

三木まり

響

昂

御代田澄江

地虫鳴く

茨

降る雨の激しく地を打つ音しきり真夜中の夢に人を探す

人の背を声のかぎりに呼ぶ夢に覚めた夜明けの雨音激し

バス停の根元に白い花束が はつなつの朝の光降りそぞぐ

朝靄の中をひとすじ伸びる道、朱色にじむ朝日が昇る

真っすぐに伸びる道のその向こう昇りゆく陽の朱に染まりゆく

いつか見た風のひかり寄せ返す波の響きは遙かに遠く

今でないいか此處ではないどこか探し続ける道の途中

宮本靖彦

グランドゴルフ

凌

茂木斌

ニルスのふしきな旅

埼

公園の凸凹グランド夢のせてグランドゴルフの球はころがる

老い友ら男女同組にぎやかにホールインめざし球をころがす

男女差のなき球技ならグランドゴルフ女性の正確コースに脱帽

市大会に上位三賞女性占め我等男は拍手をおくる

突然のみみずのによろに心安し草引に汗流す此の頃

クローバーは掘りても減らず一球根幾十の種明日は芽を出す

落陽の影に気のつく背の曲り坂の所為だよめ氣にするな

けだもの糞が散らばる中腹の山毛櫟の林をひときわ愛す
倒木に苦むすところ山毛櫟の木に寄りかかりつつ屋敷を食う
鉈を持つ不安も少し携えて烟へとゆく竹を打つため
人に会うことなく過ごす日々をはつかよろこぶ青草を刈る
狭夜月のなかほどにしてひらきたる額紫陽花の藍の深さを
木柵の囲えるところ黙しつゝ蒼馬は杳き瞳に立てり
標本を葉っぱの干物とたれか言うよろしき風の朝の食卓

三好聖三

鉈

・伊

風強き日立夏となれり列島は地震の巣とて今日も揺れ止まず
吾の心に深く刺さりしトゲありぬ拉致未帰還者思ふ心に深く
地虫鳴くディーディーと耳塞ぐも鳴き止まればこは耳鳴りか
アナウンサー懸命に政府の宣伝説明あんなに柔順でいいのだらうか
虫めがねにて友の名見付く「九条実現」全ページ広告北より南へ
氣弱さといい加減さをモコモコの常陸コキアに喰はれてゐむ
雨のち黄砂飛び来窓を叩ける風激し姪の営む長姉の法要中に

【ニルスのふしきな旅】童話ながらも読み入へて百年までのスウェーデンに親しむ
白ガチャウのモルテンの背に空の旅森と湖の国にニルス・ホルゲーション
【ニルスのふしきな旅】に百年前のスウェーデン八十三歳爺も旅する
ゴルゴなるイヌワシの名には「ゴルゴ13」の先例これがとメモをするなり
翻訳に八年かけしと訳者いふ、上下・千ページも二週ばかりに
麻布なる十番稻荷あぢさる祭りのぼり旗立ち一粒万倍日
麻布十番4番出口を地上に出て更科蕎麦へ息子大尉と

もとむらしげと 春の雨

・そ

山野幸司 君

・沖

母のために買ひしジグソーの「春の城」箱のまま二年本棚にあり
今日という日に苦楽あり樂のみを浮かべつゝ聴く春の雨音
筆頭に結婚を置く春の雨聴きつつおもう人生のよろこび
妻帰る夕べの刻を待ちわびるただそこにいる安らぎあれば
パック入りの寿司を交互に取り合つて共に笑顔になれる幸せ
くぱりもの届けて帰る春の朝いただきしバラ三輪を手に
ひつそりと生きる幸せそれもよし叙懸のニュース一面の朝

桃原佳子 花季

・沖

「平和が普通」の得がたき國に住む我ら桜が咲き牡丹が咲いて
紫陽花の花芽はピンクに染まり一つ毬の形はまだ小さし
何處からか一羽の鳩来たりさ庭を自由に啄み歩く
ツーリングのオートバイは行く野薺の咲き溢れたる緑川沿い
やりくりを続けし家計に疲れ果つ我に見よと花菖蒲咲く
雨近き夜の池に蛙鳴く声のけたまし団地静もる
花季に母は逝きませり二十五年齢重ねるほどに憶い出しおり

山下雅子 心づくし

・翌

君はよく聞こえる僕はよく見える運動会空青く澄む
管理機の代金出費預金ゼロ機械なくんば雅来たらず
雨の中米栽培の話のみ時忘れりわが道けわし
雨の中部屋に籠れる孫の顔窓越しに見る学校へ行け
苗箱に水やる朝虹の立つ芽出せ伸ばせよヒノヒカリちゃん
わが腸に溜る腹圧感じつつトラクター上一日がある
われが田に耕す道の拓けいく鳥の行列時に舞いたり

山本孟 家族

・大

いつまでも生きるつもりの昼食に豚マン二つ並びて買ひぬ
蛇口より顔を洗へば染みわたる今日の元気が身に灯りたり
新緑のいただき見下ろすモノレール太陽の塔の眼の影深し
連休を子らの家族と向きあへばこのまぶしさはかつての我が家
夕食後杜甫読みをれば本降りに冷気足より上りきて愛し
救国に一人二十役ゼレンスキーヒゲ・服装は戦時態勢
焼け出されし従姉二人を引き取りて九人の食に母の反物

養学登志子 キャベツの芽

・凌

江戸切子のグラスに香る白ワイン心づくしに母の日ほろ酔う
享保よりつづく御仏に供花捧ぐと子の慮りじいんと篤し
達者なりし母に赤き花束を昭和のバスにゆられゆられし
指ほどの路ひとにぎり香り立ち三時間余の手遊びいただく
筍に山椒をサラダにパセリ摘む小さき庭のわれの収穫
あじさいの花芽緑の葉に包まれ聞くかんつゆ入りを聞く
枝葉ゆれそのかげおどり路地ぬける薰風さやかに心地よき朝

横田敏子 郭公

・福

梅本武義

現状維持

・羊

震災後初めてと思う郭公の晴れやかな声しみじみと聴く
紫陽花の色の日毎に深まりて朝の庭は舞踏会のこと

庭先に黄蝶ひらりと舞いきたり 花を巡りて花に止まらず

昨日二羽今日は三羽の雀来てランチ楽しむ雀とわたし

穏やかに今日も暮れゆく庭に行つ戯を忘れ歳を忘れ

テレビから「知りたくない」の歌聴こゆ 幻のごと唄う菅原洋一

晩年の無き夫なりき 白髪のキラリと光る君を頬たしむ

磯田ひさ子

めでたくも

森

大浪美雪

穂先

・森

さみどりに若葉の透けるあかときを眠りしままに夫は逝きたり
静かなる夫との別れまだ息をしてゐるかのやう口すこし開け
死に近き夫の寝息のかそけさにつひの息とは思はざりしよ
ちちははのもとにまつすぐ行くやうにこと切れし夫の頬に手をあて
手摺は木 椅子は本革死のきはといへど暮しにこだはりし夫
泣きながら孫らが極に寄り添ふを僧は読経に増ざる送りと
めでたくも往生したりと高僧が涙ながらに銅鑼を打ちたり

市原やよひ

演奏会

萬

ざわめきの一瞬消えて静寂がホールを包む音の出るまで
高高とトランペット鳴り響き引き込まれ行く流れの中に
別人の顔してドラマたたく孫躍動したりステージの上
友情出演応援団は高下駄を鳴らし腕くみオッスを叫ぶ
会果てて見送る列に立つている恥ずかしそうないもの孫が
郭公の声が聞こえなくなつたねと美容院の鏡の中で

柿若葉濃く影落とす畑の道一人し歩む夏の人口

昨年よりも一戸減る里に台湾の現状維持の願いを思う
鳴き声に思い出せない小鳥の名若葉の風に吹かれて歩む
鳥の餌になるも生きるも運命と畑の幼虫路上に放る
山鳩の鳴く平穏な里をとぶ電波は不穏地震に強盗
一時間孫を自慢の聞き役に撤してコーヒー奢られ帰る
病院に義母の車椅子を押し老々介護の一端担う
白紙デモ参加者次々さがし出す監視カメラに満悦の顔

奥田陽子

PET/CT

・羊

前庭のみどりに人ら憩えるに眩しくてただ離りきたりぬ
地下二階奥へ奥へと進みぬき不意に魔窟のことき院内
（核医学）のブレートありぬまつすぐに歩みし廊下を曲れるところ
PET/CT検査受け来し明くる日の夫ひたすらに昼を眠れる
検査また検査の日日を通りきて桜木青葉となるを眩しむ
即答に決めてきたりぬ何事も百パーセントの無きを思えば
（だんだんに気が重くなる）洩らしたる医師への言葉胸にたたまん

小野雅子 萩菜

・羊

菊地栄子 番の声

・海

大熊の姓にならびて小熊姓の短歌作品ありて楽しも
足首がわづかに痛む遠くまで歩いて行つたわけではないのに
痛いからそこが傷もつわけでなく痛みは弱いところを襲ふ
二日目にどこが痛いか判明し肘を包みて貼るハリックス
自転車を漕ぐ脚速く走りゆく二人、三人雨降りはじむ
トラックも負けじと速く走りゆく漏れはじめたる夕暮れの町
芍薬の花ほどけすに萎れたりひとならば夭折といふのであらう

神田鈴子 五月

・大

みどり噴く五月の山の道をゆく足裏にやさし若草の道
共に行くいつもの道をひとり行く耳底のこゑ温めながら
子の家族と甲子園球場へ初体験手をとりくるる孫の背高し
満員のファンに埋まる観覧席トラの咆哮かとまがふ歎声
つつがなく母の日迎へ今年またカーネーションの華やぐ窓辺
花水木、白詰草に山法師 白きが揃ふ雨降る庭に
誰ひとり訪ぶ人もなく音もなく雨降り止まぬ五月の夕べ

上林節江

五月

・湾

かぎりなく明るき五月よわがめぐり一年ぶりに晴りに満つ
親孝行させて娘が磨きいるガラスの窓に透ける青空

ふっくらと少女さびしてキャッキャとはまはや騒がず涼し女の孫
温泉にはいりたいとの娘に付きて一日がかりの日帰り入浴

仙台に来たらこれよと聞く輪に極みの牛タンこんがり香る

「おばあちゃんには分からないだうな」とカラオケの楽しさ語る中学生が?
ようやく孫との波長合う頃に幕切れとなるゴールデンウイーク

しきりにも声あげているは雄鳥か櫻若葉にもう一羽見ゆ
蒸しタオル顔に当てつつ教える想いにかなううつろう時を
両腕を振り子のように振っているうしろ姿は生島さんだ
針のメド通すに時間かかりつ糸ほつれきつボタン付け替う
木犀の木下に寄りて聴かんとす時定まる番の声を
打合せするべきだった、尺八の〈錦秋〉にならず、ピッコロだった
散る桜靴底にため汚したる撮影会の車の座席

北山雪男 リラ冷えの街

・伊

年ごとに希薄となりしメーテーの街行く旗の今日は何色
来年は憲法喜寿で俺も喜寿、いまズタズタにされつゝあるが
過労死の諸さまよふひとりにて息子は就職氷河期世代
口開く意志も氣力も絶え絶えの息子、明日より休職といふ
花もまた咲き疲れしや月光の夜の深間にリラ冷えの街
またひとつ父の齢に近づきて山の向かうに立つ煙見ゆ
おおい俺もすぐ行くからな 叫べども待つ影あらぬ夢に、血の池

草刈十郎 葉桜

葉桜

・世

島じまを曳きゆくとく船のゆく海光満てる卯月の海を
やみくもにミサイル発射せし國の民は耳目を閉ざされ飢うる
新聞の「おくやみ」欄に載りしひとなべてわれより若き人ひと
錢湯の煙突のけむり小春日の空に流れし速き日の景
禿頭の人の稚氣まだ枯れずて人笑はするけふ四月馬鹿
近道となる葉の花の畦通る下校の子らの帽子も黄色
花ははや葉桜となるその速さ余命たしかに削られてゆく

國井節子 油断

・春

人生の最終の頃おそはる自転車は転ぶし手首は裂傷
人生のこれが最後か今の今自転車の事故わが家の前で
自転車の上に倒れてもがきる私の右手の真赤な血潮
人生の最後の祝ひをしたばかりあそれなのに血まみれの手よ
もがきつつやつと起きたる家の前呼べど誰も居ぬ家
行きつけの整形病院空いてて息子の車で駆け付けにけり
病院の三階の窓東向き若草山より朝の日上の

河野繁子 鞠月

・雁

水張田に映りて走る黄の車この世の記憶捨つるがに消ゆ

梅雨入りと雨のやむ間の散歩みち初音さわやかほとときす聞く
空き家よりいでし理の若からず急ぎもせずに道を横切る
出会いては別れる人の縁に似て大山蓮華一日の花

うす闇の林の中に見張りたるバイオウレンと出会いし日あり

「らんまん」の場面に見入るかの時の景色と同じ花の満開
せんていの枝を吾が見て婿の切る日曜の晴れ思いの叶う

小林能子 絵本

・羊

「声に出すことばのえほん」勧められ 嘸下も舌の筋トレの末
おそろしき啞せる瞬間みぐるしと思へばこその「^は」^は_下体操
滑舌も喰下も認知にはると回し読みする「生麦生米生卵」
臍なる絵本の記憶すらすらと舌に蘇る「ユニオンジャックの…」
「メリーサン友だち六人呼んでます」 初の絵本は母の読み聞かせ
詣んじて「ここは明るい食堂車」幼の夢は今もわが夢
膝の辺に絵本をひらき唱へたる「白魚とる子は杓子ですくう」

坂上直美

五月の梅雨入り

・天

ワッショイショイ! 春の祭列過ぎてゆく神輿の金を煌めかせつつ
男より先に死んではならぬのは女のさだめ今それを生く
読みかけて閉じてしまいぬ貧しくて子なく猫いる夫婦の話
有樂斎恥に耐えぬき古稀越えき「そのまま生きよ」吾も倣わん
生きてあれとにかく生きよ命さえあらばどうとも叶うものゆえ
梅雨に入る紫陽花は色鮮やかに物憂き日々を励まさんとす
雨続く君の遺せるあの本とこの本読まん珈琲を手に

口粗^{あら}波しぶき吐きまた泳ぐ次の波へと日本海へ
ケルケルと動く命を我が物にヤスの穂先の一つの命を
踵からトゲがでてきた三年目大波がさらうあの夏の岩
大物が潜む岩礁晒す波ゆっくり泳ぐ鮑とり棒
藻のすき間拾いしサザエ抗わず弱き吸盤ゆがむ肉色
ふわふわと海底占める石もずく両手で搔き取る息続くまで
水中の獲物に腰が撓みいる首痛くなる浜はもうすぐ

近藤栄昭 芳仙

物な思ひそ

・信

京深き貴船の道を歩みをり信濃にどこか似たるこの道

そのむかし「氣生嶺」といひし神社なり大地の氣とふをこの手に欲ります
「いにしへのままの復元めざします」石工はタガネ打つ手休めず
螢よむ和泉式部を想ふとき木蔭の闇は暗くせつなし
神が返歌「・・物な思ひそ」川水の急なる見ればたちまちにすぐ

川床の提灯ゆらす風ありて川水の音ますます高き

右源太も左源太もある川床に蓼酢の焼きアユことさらうまき

近藤栄昭 夏の海

夏の海

・虹

坂出裕子 つづじ

・洛

柴田登志恵

・天
脳内図鑑

川波の春の光にきらめくを見て帰り来ぬ朝の散歩ゆ
川べりの散歩の道に鴨が二羽泳ぐを見たり今日のしあはせ
この歳になりてはじめて見たやうな気がする桜満開の景
公園の散歩の道に拾ひたるくれなる落ち葉けふのしあはせ
さまざまにピンクの色を匂はせてさつきつじが庭に満開
庭中にさつきつじが一杯咲けどさびしいコロナの春は
無事ですの声にこちらが励まされ元気いだくコロナ禍なれど

佐藤道子 ワンちゃん

・甲

「四日前トイードルが死にました」思はず息子が言ふ「御愁傷様です」
「八年前一緒に散歩してました」向かひの犬の飼主が言ふ
美容院赤いリボンをつけて来しトイードルランちゃん可愛かりしよ
「お嬢さんでした」と向かひの女が言ふトイードルランちゃん柔らかかりし
ランちゃんの声の聞こえぬ朝の道御主人様とも会はずになりぬ
抱きつき頬舐めたがる白い犬「ごめんねごめんね」と飼主が言ふ
踏切が恐くて渡れぬ犬と言ふ抱かれて渡る線路の上を

篠原まり子

母子草

・羊

供えたる白き芍薬わらと花びら崩れ母の日の朝
三人の首相と対話し尾身さんのさわやかな面五月の新聞
公園を歩む歩幅にはうこ草思わず寄りて一株を抜く
ほっこ草綿毛飛ばしておちこちに踏まれ厭まれ尚もやさしき
緋に萌ゆる久留米つづじの脇わいを遠く隔てるほっこ草の色
いち早くわが病巣を見付けたる主治医は今日も電子文字に向く
父よりも母よりも齢重ねゆき夢のあとさきラジオがありて

須川千恵香 時のうつろひ

・眉

鶴鉢石は神のご縁で紅白の綿巻かれをり淡路に集ふ
太古の岩まだら模様の絵島なり月見の歌人に岩肌照らす
広大な白神山麓冬枯れの山廻るくアナ芽吹き初む
萌黄色に麓帯なす白神山一気に峰へと春駆け上る
待ちをりし森の動物猿 熊は枝を引き寄せ新芽をあさる
嘴長きアカゲラ激しく幹打てる洞の樹液か恋の響きか
白神山二五〇年のブナの幹雨水滝と流れ落ちくる

鈴木結志

岩盤浴

・福

噴氣孔数多くする奥秘境出で湯今にも噴火あやぶむ
奥出で湯八幡平の岩盤浴 命をつなぐ人ら寄り合う
むしろ立て仮小屋にころ寝の岩盤浴知らぬ同士が肌を寄せ合つ
まはだかの男女こちや混ぜ岩盤浴癌とたかう妻でありにき
一途なる妻の願いの岩盤浴報徳の仕報に重ねて祈りし
間欠泉一気に噴き上げ天界に地上百メートルの湯傘飾りき
岩盤浴に耐え来し妻も友も逝き一人往事の思いを偲ぶ

関根榮子 アルファ波

・埼

シリーズ「第一歌集を読む」こ案内

目覚め早き夏の臥所にふと思う露の野道を行く人あらん

昼時に帰らぬ夫は畑にて弁当を食す愉しみありて

めずらしく見かけし猫の走り去る野中といえど自販機のあり

次々と羊を放ちわれは今はるかなる地の遊牧民か

民族の違えばやはりそぐわぬか羊をいつ迄数えていても

眠れねばベランダに出てこの夜の流星群を待つことも良き

アルファ波の出れば眠れると知りよりひと日のうちの良き事思う

関根和美

夜明け稻荷

・埼

目印がばづんとのこる幸せか夜明け稻荷がみえたら左折

車酔いひとりからし祖母をよろこばすその一心でわれら集いき

筍の皮にうめ干しやぶれずに誰が一番まつ赤と競いぬ

従妹より聞くわが姿わがことばパッチワーカーのことつなぎみん

広告主見つからぬ白のべらぼう半年すぎても一年すぎても

夢のなか母をさがして幾山河こえゆけどなお届かぬを知る

神の目に正しからざることならん祈り願つも叶わぬひとつ

久我田鶴子

文字たち

・羊

雨降る日の水平線をさししめす大型船の浮くベイエリア

六月の朝のベランダいつ来たる蜻蛉か鉢の葉にとどまるは

雲雀はももはやわが眼にとらへ得ずこそするあたりあふぎみるのみだれだから 暗くてわからぬと言ふやうに紐を引つぱり灯りをつける

パンダ葵の花パンダ顔はらほらとわれに一鉢もたせてひとはひたすらに汚名を雪ぐといふがこと保田與重郎を書ける人はも

書くことは種を埋めるにも似てはるか発芽のときを待てる文字たち

◆第一期・対象歌集と執筆者

・河野繁子歌集『雁来紅のうた』*

柴田登志恵
三好聖三

・八乙女由朗歌集『阿武隈川』*

石田明彦
阿藤たつる

・中島義雄歌集『銀霜日記』*

西堤啓子
もとむらしげと

・市原志郎歌集『ひよどりの風景』*

丸山修
藤田しん子

・市野千鶴子歌集『あわき茜』*

高橋啓子
仲西正子

・菊地栄子歌集『山川みどり』*

大寺智子
小西美智子歌集『はなかつみ』*

・白子れい歌集『疏水のほとり』*

西堤啓子
浜本美美歌集『夢の川』

(*は、発表済み)

◆第二期以降の対象歌集(予定)

・田土才惠歌集『かざぐるま』・牧雄彦歌集『誰もゐぬ部屋』

・辻彌生歌集『霧しうさまく』・中島央子歌集『桃李』

・近藤良子(芳仙)歌集『花籠』・朝井恭子歌集『風韻』

・橋本曠子歌集『いくとせを』・山下雅子歌集『陽光』

・田村利子歌集『霧の縞帳』・小野雅子歌集『花筐』

・中村博子歌集『流れ逝くもの』・鈴木文子歌集『西窓の彼方』

・船田清子歌集『藍の時』・鈴木結志歌集『不易流行』

・坂出裕子歌集『日高川水游』・三浦好博歌集『水の辺のうた』

・篠原まり子歌集『ひとりの春』・小宮山玉江歌集『冬の林檎』

・今村叶子歌集『カデンツ』
以下、続く予定です。

今月の二人

いちじく農家の輪

藤井 裕子

農家の嫁

いちじくの洗礼受けて顔の腫れ白い樹液はあな恐ろしや
雨降れば傷つきやすき無花果の日の日を見ずに土の肥やしに
廃棄するいちじく惜しと立ち上がりジャム作りの輪町に広がる
主婦たちのいちじく愛でて生まれし輪今年知事より表彰賜う
何をしても先ずは一言「ありがとう」祖母の口癖心に残る
わが息子作りしトマト「桃太郎」胸に抱きて父逝きませり
花好きの亡母にかかると枯れかけし薔薇生き生きと蘇りたり
五月雨のあじさい濡らす夕暮れに義母の最期を自室に看取る
そここに亡母の育てしクレマチス濃き紫の竹に寄りそう
水無月の不思議な縁夫とわれ両親四人見送りし月
早五年大正琴のレッスンは指軽やかに「真っ赤な太陽」
ぶかぶかの制服帽子ランドセル「大きくなれ」と背にまじないを
ぼうたんの番傘の中咲き誇るその色香やがて崩れ散るらん

農家に嫁いできて四十四年が経とうとしています。サラリーマンの家庭で育ち農家のことは何もわからず、不安な日々を過ごしていました。両親は一日中畠に出かけ家のことは主人の祖母に色々と教えてもらいました。

一男二女に恵まれ子育てもひと段落して来た頃に、ご近所のいちじく農家の有志の女性達といちじくの勉強会をするようになりました。

平成十年に会を設立し、ジャム作り、ドライいちじくなど色々なアイデアを出し合つて羽曳野のいちじくのPRに頑張ってきました。

そうこうしているうちに義母が認知症を患い、主人は早期退職をして母の介護を一緒に手伝ってくれましたので、心の余裕が持てるようになりました。主人の方が一足早く短歌に出会い、頭をひねりながら指折り数えて作る姿を目にして、私もやつてみようかなと思うようになり、主人の恩師のいいただき、今に至っております。会話の少なくなりがちな老後に短歌を通してお互に「ああだ、こうだ」と言いながら日々暮らしております。

義父を九十四歳、義母を二年後に九十三歳で無事に見送ることが出来ました。両親の生き方を手本に農作業の合間に短歌作りを頑張っています。

青春到来

田中 昌子

傘寿に想う

短歌を始めたのは、一年前ご近所の永田

冬期鬱心身共に弱りしがWBC観て癒やされぬ

酔いしれた若侍の躍動に希望の光大谷選手は
ひとりみ

独身は野球応援感動も共感できずもどかしいほど

我が子等の三角ベース草野球思い出させた侍ジャパン

勝利して飛び跳ね歓喜するを観て幾人的心熱くさせしか

終戦の翌年父は病死する三重県伊勢の疎開先にて

大阪で服地と仕立屋営むも大空襲で跡形も無く

父母の戦中戦後の子育てはいかばかりかと感謝あるのみ

いつの間に弱きこの身も傘寿なりあまたの傘に守られて来し

折々の喜び悲しみある中で歌あればこそ歩いて来れた

八十路前三十一文字の新しき趣味で行く道明るくなりぬ

今日も亦三十一文字に想い載せ言葉紡ぐ指折り数えて
ことのは

八十年山や谷をも歩いて來た今なだらかな花咲く道に

は、手芸の会、叙事歌を歌う会、短歌会や落語、旅行なども楽しんでいます。様々な事があつた人生ですが、これからはなるべく笑って歩いて行こうと思ひます。

◆ 今月の二人・藤井裕子作品評 ◆

◆ 今月の二人・田中昌子作品評 ◆

評者・久我田鶴子

あまたの傘に守られて

藤井さんは、大阪府羽曳野市在住。農家に嫁いで四十四年という。四月号の「今月の二人」に登場した藤井君康さんは夫。

・いちじくの洗礼受けで顔の腫れ白い樹液はあな恐るしや
無花果の葉や茎を切ると白い液体が出てくる。葉にもなるらしいが、藤井さんはこの液で顔が腫れてしまった。「いちじくの洗礼」である。いちじくの樹液、「あな恐ろしや」となるわけだが、そう言いながらどこか余裕があるような。

・廃棄するいちじく惜しと立ち上がりジャム作りの輪町に広がる

傷みやすい無花果。商品にならないからと廃棄されていたのを、何とかしたいと思つた藤井さんたち。ジャムにドライフルーツにと加工して、商品化をはかったようだ。「立ち上がり」「広がる」に窺える前向きな行動力。頼もしい。

・わが息子作りしトマト「桃太郎」胸に抱きて父逝きませり
「桃太郎」はやはりトマトだった(四月号の君康作品と対にして読みたい)。初句は、「わが息子の」と、字余りになつても助詞の「の」を入れたほうが良いだろう。

・五月雨のあじさい濡らす夕暮れに義母の最期を自室に看取る屋。淡々とした描写に看取りのこころが籠もつてゐる。
・水無月の不思議な縁夫とわれ両親四人見送りし月

夫と二人で、四人の両親を見送り、それがいずれも水無月だったと言うのだろう。「水無月の不思議な縁」としか言い様がない。四句目、ここも「両親四人を」と助詞を補いたい。

田中さんは、奈良県生駒市在住。傘寿を前にして、この春のWBC、侍ジャパンの活躍に胸を躍らせたようだ。

・酔いしれた若侍の躍動に希望の光大谷選手は

侍ジャパンの活躍の中でも、大谷翔平選手は「希望の光」と映つたようだ。テレビ観戦しながら感じたワクワクドキドキが今なお冷めやらない感じ。年齢なんて関係なさそう。

・我が子等の三角ベース草野球思い出させた侍ジャパン
WBCから三角ベース草野球へ。生き生きと走り回っていた

我が子の姿が蘇つてきたらしい。ここには年齢が滲む。
・終戦の翌年父は病死する三重県伊勢の疎開先にて

・大阪で服地と仕立屋営むも大空襲で跡形も無く

昭和十八年生まれの作者。父が疎開先で亡くなつたときは、わずか三歳だった。地名の出てくる二首、セットで読むと終戦前の家族の様子がよく分かる。感情を交えないまま、読者を引き込む力。事実が何よりも語つている。

・いつの間に弱きこの身も傘寿なりあまたの傘に守られて来し
からだが小さくて弱かったという田中さん。そのような身で傘寿を迎えることができたのは、たくさんの傘に守られてきたからだと思っている。「傘寿」から導き出された「あまたの傘」。多くの人との出会い、受けた恩愛を思うのだろう。

・八十路前三十一文字の新しき趣味で行く道明るくなりぬ

そして、八十歳を前にして出会つた短歌。田中さんは他にもいくつもの趣味を持っているようだが、短歌に出会い、これから行く道が明るくなつたと言う。嬉しいことだ。

上田市丸子町の、家の表には依田川が流れ裏手には丸子城跡の山のある所に嫁いで五十年が過ぎました。都会の人達が空気がおいしいと喜んでくれるような環境で明るく楽しく暮らして居りましたが、平成十三年に夫が病に倒れて他界してしまいました。その間、看病の傍ら病室の窓から見える山々の移り変わりを目にして自己流の詩歌などをノートに記していました。

夫が亡くなった後は悲しみの中にいましたが、そんな折、介護保険制度ができ、ヘルパー（訪問介護員）を必要としているから資格をとつたらどうかと友人が勧めてくれました。資格をとる勉強なら行ってみようかと奮起し、それから四ヶ月余りでヘルパーの資格を取得しました。

その後、ヘルパーとして働き始めて数年が過ぎた頃の平成二十年、訪問先で盲目の姫、阿部智子さんに出会いました。その時は角膜移植をしたばかりで痛々しい姿だったことを今でも覚えています。阿部さんのお宅に訪問を重ねているうちに、柱の短冊に目がとまりました。お聞きしたところ、阿部さんは八十二歳の時、近藤芳仙先生について短歌を始めたと教えて下さいました。私は代筆で書かれた短冊のきれいな短歌を読み感動し思わずノートに書き留めていました。

ある日、短歌をノートに書き留めていた

私の行動を阿部さんが近藤先生にお話しして下さいました。そして、先生は「短冊を写し取っているのであれば、吉池さんも短歌が作れるかもしれない」とおっしゃってましたと阿部さんが話して下さいました。その言葉を聞いた時は驚きと嬉しさに舞い上がりました。とりあえず五七五七七と三十音にまとめて詠んでと言われ、恥ずかし

いつも先生は「どんどん詠んで下さい」と気さくに言葉掛けをして下さいます。その言葉がとても好きで励まされます。平成二十八年に初めて軽井沢大会に参加して地中海の皆様をバスへ案内する係を手伝いました。班別歌会では緊張してしまい批評も頭に入りませんでしたが、続いて姫路大会、福島大会と参加しました。その時々の感動を詠み、拙い作ながらも批評欄に取り上げていただき嬉しかったです。

その頃、阿部さんは平成二十五年、九十四歳の時に歌集『みおつくし』を出版しました。ヘルパーさんは私が事を褒め歌に詠む知恵なきわれは恥じ入るばかり

私と短歌との出会い

吉池ケサヨ

252

さも忘れて詠み、阿部さんから近藤先生に渡していただくことになりました。

阿部さんは「和顔愛語」を座右の銘にしており、その名言通り穏やかなお人柄でした。令和元年六月に永眠され、九十九歳でした。

阿部さん、ありがとうございます。短歌と素晴らしい先生との出会いは、私の宝物です。これからも桑の実歌会の皆様と歌を詠み続けたいと思います。